

●今日の聖書箇所は「ラザロの復活」の一場面です。この物語は、イエス様が愛するラザロをよみがえらせた奇跡ですが、詳しく読むと一つの疑問が浮かびます。それはなぜイエス様はラザロの病気の知らせを聞いても、すぐに向かわなかったのかということです。マリアとマルタも「主よ、もしここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と不満を述べています。

5～6節には、「**イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。(それゆえ)ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された**」と記されています。そして、ラザロが死んで4日経った後、イエス様は訪れ、涙を流しながらラザロを呼びかけ、ラザロは墓からよみがえるのです。

●この出来事を理解する鍵は、「**わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる**」というイエス様の言葉です。私たちは必ず「死」を迎えます。時に、自分の死や愛する者の死に不安を覚えます。しかし、イエス様は「死が終わりではない」と宣言されました。ラザロをよみがえらせたときも、「人々が信じるためである」と言われています。つまり、「たとえ死んでも、私は共にいる。だから死をも恐れる必要はない」という約束を示されたのです。

●ラザロの一時的な復活や癒しは、その場限りの喜びです。イエス様が本当に伝えなかったのはそのような瞬間的な奇跡の喜びではありません。聖書が語る「永遠の命」の本質は、死さえも支配されるイエス様が、私たちの生と死のすべてに深い愛を持って臨んでおられることを信じることにあります。その信仰によって、今を平安に喜びを持って生きなさい——これが聖書のメッセージです。

●同志社大学とニューヨークのラトガース大学で教鞭をとられた大林浩牧師は、「永遠の命とは、一人ひとりの人間に無限の意味と価値が認められることだ」と語っています。大林先生は、事故で息子さんを亡くされた経験からこの真理に気づかれたそうです。「あの子に代わる者はない。生きているときも、死んだ後も、かけがえのない尊い存在だった」そう語っておられます。失った愛する人々は、私たちにとって決して代替不可能な存在です。永遠の命とは、人が死んでも、誰かの心や記憶の中で働き続けることでもあるのです。神様は、この世においても天においてもイエス・キリストを通して、私たち全ての命を「かけがえのない存在」として愛してくださっている。この「永遠の命」の希望と喜びを胸に共に生きていきたい、そう心から願います。